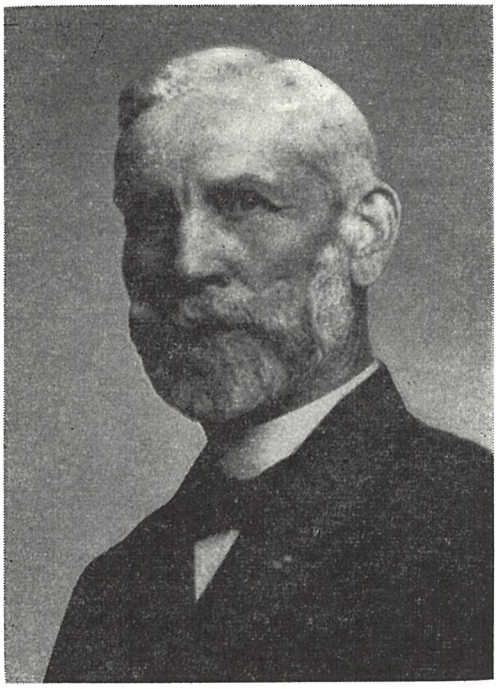

同志社人物誌（7）

J. D. デビス

森中章光

明治新政府が、始めて米欧諸国に親善使節を派遣したのは、一八七一年(明治四年)十二月半ばのことである。そのとき、特命全権大使岩倉具視、同副使木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳その他随員ら、一行四十八名が乗った桑港帰航の米国船は、太平洋汽船会社所属の、外輪船四千五百トン余りの『アメリカ号』であったのだが、この日本使節の一行が、あだかも米国に向って出発せんとする、凡そ半ヵ月ばかり前のことである。

同じ『アメリカ号』で日本に渡来した年若き米人夫妻がいた。彼らは横浜に数日間滞在した後、さらに西航して、目的の地神戸に上陸するや、間もなく諏訪山下に手狭ながら一軒の二階家を借りうけ、先ずそこに落着いて、いよいよ日本における、彼らの新たなる生活の第一歩を踏み出すことになったのである。この米人こそ、アメリカン・ボード海外伝道局が、福音播種のため、グリーンD.C. Greeneギュリック O. H. Glickらに次いで異教未開拓の日本に、選抜派遣した宣教師デビス Jerome Dean Davis そして彼の妻なのであった。当時デビスは未だ三十三歳の血気盛り、長身にして筋骨逞しく、風貌おのずから凛然として、一目、人をしてその凡器でないことを感じさせるものがあったようだ。

×

そこで、極めて簡単ながら、彼の来歴について少しばかり触れておくことにしよう。彼は一八三八年（天保九年）一月十七日、北米ニューヨーク州のグロートンGrotonに呱々の声をあげた。その祖先は遠く十七世紀のころ、英国ウエールスから、北米マサチュセッツの海浜に渡ってきたもので、代々新英州（ニューイングランド）に

定住し、その家系からは、清教的高潔剛健の人物が、多く出ているということだ。貧農の家に生れた彼は、正規の教育もうけることができなかったとはいえ、篤信の母からうけた感化は、実に深いものがあった。しかるに、不幸にして九歳のときこの母を喪い、その翌年、彼は父に伴はれてイリノイ州のダンディーに移った。そして父とともに開墾に従事しながら、寸暇を惜んでは独学を続けて、数年を過したのである。かくて、十八歳のころ受験の結果、ついに小学校の教員に奉職した。とはいえ、彼の向学精神はそれで満足するものではなかった。彼の二十一歳のときには、その努力が酬いられ、日夜の念願が叶って、幸いにもビロイト大学に入学することができたのである。だが固より青年ジェロームは苦学生の身である。毎朝未明に床を離れて、燃料の木を挽き、あるいは校庭の掃除から教室の整頓など、種々の校内労働をしながら、学資をかせいだ。しかも、このような労苦勉学のうちに、かって彼の母が、幼い彼の霊に培っておいた信仰の種は、根深くもおもむろに成育していたのである。彼が一身を神に献げ、生涯を福音宣伝のために投じようという決心覚悟は、まさに、この時代にすでに、いささかの動揺すら見ないまで、強固なものになっていたことと想像されるのだ。

×

しかるに、一八六一年彼が二十三歳のとき、ついにあの南北戦争が勃発した。彼は夏期休暇中の旅行先で、はからずも朝刊新聞に掲げられた北軍の募兵広告を読んだのである。奴隷解放！　人道の戦！　こうした文字に、彼生来の義血が冷静であろうはずがない。彼は断然学業を放棄して、義勇軍を志願し、勇躍イリノイ歩兵第五十二連隊に入隊した。彼は間もなく名誉ある連隊旗手として、有名なシャイローの激戦に参加したのであるが、此処は戦略上味方の死命を制する要地なのだ。しかも敵弾雨飛の中に、あるいは斃れ、あるいは傷つくもの続出して、形勢はすでに北軍連隊の全滅をさえ、危ぶましめるものがあった。

あだかも、この味方の運命を決するであろう、重大なる危機にあたり、突如！　前線の一角から、声を限りに軍歌が歌われ始めた。それは旗手デビス軍曹であった。

この歌声は、忽ちにして全軍に、次から次にと広がっていった。そして、鮮血にまみれて地上に倒れていた傷兵までも、已れの苦痛をうち忘れて歌うのであった。銃砲の轟音が山河を揺がす中に、今や、味方の士気を衝天の勢いに鼓舞し、その勇猛心を百千倍にふるいたたせるものは、実に、将兵の魂に不思議な力を呼び醒ます、この軍歌であったのだ。デビス軍曹は、この戦闘で左上脚部に貫通銃創をうけたが、しかし、勝敗を決する重要な地点は、完全に死守された。彼は後に少尉に抜擢せられ、さらに軍功を重ねるに従い、異数の累進によって大佐に任ぜられた。そして連隊長として、一軍の総指揮をとるようにもなったのであるが、一八六五年四月をもって、さしも激烈を極めた戦いも、ついに北軍の勝利をもって終局を告げた。

×

さて、終戦後のデビス大佐はどうであったか。彼としては、黒奴解放の人道戦に、決然と起ちあがり、挺身奮戦したのであって、戦いが目的を達すれば、もはや剣も軍服も、彼には無用なものであった。二十七歳のデビス大佐は、再びビロイト大学の一青年学生となり、戦前の勉学生活に入ったのである。そし

て一八六六年の夏同校を卒業するや、彼は一大決意をもって、シカゴ神学校に進んだ。彼はシャイローの激戦で身に銃弾をうけながら、戦死をまぬがれたことを、単なる僥倖などとは、決して考えなかったであろう。彼自身には、残る生涯、必らず果さなければならない、大きな使命が待っていることを、心の奥底に深く、感じたにちがいない。彼が神学校を選んだ理由も、おそらくは、そこにあったのではあるまいか。然り、彼は神国建設のため、神の一兵士となって戦うこと、キリストの福音播種のため、心身を献げて、その働き人となることこそ、彼の生涯における、最大唯一の使命であることを、自覚したがためなのだ。

デビスがシカゴ神学校三ヵ年の業を卒えたのは、一八六九年のことであったが、神の一兵卒、キリストの一下僕としての伝道師デビスが、彼自らの希望によって選んだ、最初の神の国開墾地は、コロラド州デンバーの北方、ロッキー山系中のワイヨーミング州シャイエン Cheyenne であった。ここは海抜六千尺、太平洋に通じる鉄道沿線の地で、坑夫や浮浪労働者が多く、伝道には最も困難とせられたところであったのだ。彼は赴任後間もなく妻を迎へ、妻と二人の労力で、先ず粗末ながらも、小さい仮会堂を建てた。そして、無学粗暴な労働者を相手に、彼生来の情熱と、不屈の根性と、弾雨の中をくぐった軍人デビスのあの勇敢さとで、専ら伝道のためにその心身を献げたのである。

このようにして、彼が始めての福音播種に、「心を尽し、精神を尽し、思を尽し」て日夜働いていたとき、すでに夙くも、神の大命は彼に降下さるべく用意されていた。シャイエン伝道は、あるいは、この大命のために必要とせられた聖意と、解してよいのではないだろうか。彼はシャイエン伝道僅かに二年たらずで、遠く太平洋の彼岸、極東日本に、アメリカン・ボード海外伝道局の宣教師として、派遣せられることになったのである。しかも、その当時の日本には、かの『切支丹宗門の儀は是迄御禁制の通り固く可二相守一事』と書いた、いわゆる高札が、まだ到るところに立てられていたのだ。

×

『地球は狭い、人類は一つである。いでや、この数千万人の間に、基督教の基礎を築かん。』と、一大使命を感じて日本に渡来したデビスは、諏訪山下に根拠をおいたとはいえ、耶蘇教禁制の高札が撤去されない限り、直ちに伝道に着手することはできなかった。そこで将来の大計を胸に秘めながら、差当り家塾ともいうべき英語学校を開いたのであるが、これが案外の評判を呼んで、寧ろ収容を制限しなければならないほどであった。とかくするうちに、一八七三年（明治六年）の二月、待ちに待っていた耶蘇教禁制の高札が、ついに撤去されるに至ったので、彼はようやくにして公然と伝道師養成所を設け、有為なる青年の教育に力を傾注したのである。

そのころ彼は、一夏を有馬温泉で過ごしたことがあるが、遇然なことから、三田の旧藩主九鬼隆義（後子爵）と相知り、それが奇しくも、彼の三田伝道の機縁をつくることになった。爾来、彼は雨が降っても、風が吹いても、毎週土曜日には、必らず乗馬で六甲の山路を越え、二十哩の奥地三田に通うたのだ。果せるかな、彼の播いた福音の活種は、路の傍らにも、土うすき礫地にも、茨の中にも落ちないで、徐らに芽生え、そして成長していったのである。中でも、後に心理学の権威と

なった、文学博士元良勇次郎のごとき、とくにデビスの培育をうけること多大であった。

ところで、デビスが日本にきていらい、痛切に感じたことは、彼が接触した日本青年が、新知識を飢え渇くがごとく求めているということなのであった。だから、もし彼らを満足させることができなかったならば、デビスのもとに幾ら青年が集ってきても、残念ながら、網の目から魚が逃げてゆくように、有数の青年らはいつか去ってしまうのである。新日本の次代を担う青年に、今にして活種を培養しておかなかったならば、将来はどうなるであろう。デビスは遥々海を越えて日本にきた自己の一大使命を考えるとき、手を空しくして敗北の神兵たることは、どうしてもできなかった。そうしたデビスの強い使命感は、アメリカン・ボードに送った書面にも『われわれは、直ちに完備せる学校を開設しないならば、われわれの周囲に折角集ってきた、基督教を信じようとする青年らの大部分を、われわれの事業からとり遁がしてしまうでしょう。』といい、また『官立諸学校の、あの唯物主義の学説に対抗して、存分に闘いうる伝道者をつくろうと思うならば、どうしてもこの際、基督教主義の大学を開設しなければならないと考えます。これはわれわれが唯一の希望とするところです。いまや、われわれはこの問題に、真向から直面しているのであります。』とも訴えているのだ。

×

あだかもこのときにあたり、明治七年の晩秋に、新島が祖国日本に、アメリカから十年ぶりに帰ってきた。そして翌八年早々関西に下り、教育救国の念願に燃えた彼は、直ちに学校創設運動に着手したのである。デビスが心からの共鳴と、満腔の歓びと、限りなき希望をもって、新島の計画に参加したのは、当然であったといわねばならない。彼は寧ろ、それこそ神よりの応答であり、基督教邪教視の根強い、霊的荒蕪地である日本に、遠大な神の経綸実現の徴であると解して、熱い感謝をささげたことであろう。

かくて、これより同志社の創業後、デビスと新島の悪戦苦闘は、到底想像もおよばぬものが続いたのだ。公吏の圧迫、僧侶神官らの妨害等々、それはまさに、四面楚歌の中、全く無援孤立の状態におかれた。あるものは嘲笑した。彼らの事業は〃比叡山を琵琶湖に移すようなものである〃と。けれども彼らの信念は巌のごとく自若不動であった。またあるときは、ミッションの年会で、同志社存続問題について、宣教師の間にさえも、議論が沸騰したのであるが、デビスはそのとき、敢然と起って、南北戦争中の一エピソードをひき『味方の軍勢はすでに半ば以上も戦死しているとき、二十哩の彼方まで進んできたわが軍の大将から〃そこを死守せよ。われ今ゆく〃という信号があった。副将コールスはこれに答えた〃われには片腕と片顎がまだ残っている。地獄の全軍攻め寄せるとも、うち滅ぼすにたる〃と、わたしが京都の地位を固守せんとする態度は、ただこれに過ぎない。』と答弁した。

おもうに、デビスと新島、この二人は如何なるときにおいても、文字通り一心同体なのであった。苦難が彼らに襲いかかれば、かかるほど、彼らは強く固く結ばれたのである。それは、単なる友情であるとか、同士であるといったものではなく、彼らが日本に神国を建設せんがために、三千万の生霊に福音の活種を播かんがために、コールス副将がいう〃片腕と片顎〃が残っている限り、なお遠大

な目標を望んで、驀進を続けてやまない、彼らの熱火の信仰による一大使命感！　この使命感の結合が然らしめたのである。これを考えずしては、両者の一心同体的であったことを、真に理解することはできないであろう。

×

遠く八十余年の往昔を顧れば、両者の信仰が、始めて同志社を実現し、またこれをよく支え得たのだといえる。新島一人の力で、同志社の基礎が磐石につくられたであろうか？故浮田和民博士は、新島デビスの二人をもって、同志社の父母であるといった。まさに然り、この父母によって同志社は生れ、この父母によって同志社は育てられたのである。二人は、その人を動かす至誠において、その石がねをも貫く意志において、その万敵をも恐れぬ良心的大勇において、まことに不思議な共通性をもっていたが、いま一つは、二人がその熱涙においても、共通であったことだ。

デビスは新島の歿後、深き哀痛のうちに、心友の伝記を綴り、その偉れた生涯を伝えるとともに、絶えず遺業を見まもっていたが、二十年後の一八九〇年（明治四十三年）十一月四日、旅行の途中米国オベリンで、病のため七十有二年の生涯を畢った〝わが生涯は日本のために尽し、わが祈祷はその教化のために捧げた〟といい、また〝わが生涯はわが遺言である〟〝My life is my message〟と告げて……。

憶えば、春秋めぐること五十余年。少年時代の筆者の眼に映った、あの長身にして、白髪銀髯の凛然たる老先生の姿！　今もなお、忘れんとして忘れえないものがある。

（大二・普卒）

J・D・デビス先生の著書としては次のものがある。

（編集部）

真の道を知るの近路	A・B・C・F・M	明治5年
神学之大原理	福音社	明治24年
新島襄先生之伝	警醒社	〃
徳育について	〃	明治33年
贖罪論	〃	〃
新島襄先生伝	〃	明治44年
Hand-Book of Christian Evidences.	Fukuinsha	1890
A maker of new Japan —Rev. Joseph Nardy Neesima	New York	1894
Kirisutokyo rinrigaku koyo.	Keiseisha	1908
A skech of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima, LLd.	Doshisha.	1936

同志社香里高等学校

募集人員　200名・男子のみ
受付期間　2月5日(水)～2月15日(土)
試 験 日　2月20日(木)・21日(金)
試験科目　第1日　社会・数学・国語・面接
　　第2日　理科・英語・面接

同志社香里中学校

募集人員　150名・男子のみ
受付期間　2月17日(月)～2月26日(水)
試 験 日　3月2日(月)・3日(火)
試験科目　第1日　社会・数学・面接
　　第2日　国語・理科・面接